

ことばの旅

—「自由」という語について(補)

経済学部 葛谷 登

拙文を敬愛する先生のご高覧に供したところ、思いがけなくも貴重なご教示をいただきました。中国思想がご専門の愛知大学名誉教授の先生からは鈴木大拙の禪的解釈は『莊子』によるものであるとの、静岡大学名誉教授の英文学がご専門の先生からはシェイクスピアの作品では多くの場合 free という語はなにかに捉われていない状態を指すとの、行政法学がご専門の法律家の先生からは旧制四校時代に J.S. ミルの On Liberty が教科書(恐らく英語の授業)であったとの、福祉がご専門の先生からは敗戦により豊橋の予備士官学校(今の愛知大学豊橋校地)から解放されたが、「～への自由」が見出せず、虚脱の状態になられたとか、というものでした。

慶應義塾大学名誉教授の先生からは升田準子『「自由」小考～キリシタン版に見られる用例をめぐって～』(『キリシタン文化研究会会報』105号、1995年)という論考を教えてくださいました。このような題で書く場合には夙に読むべき基本文献である事を知り、冷汗三斗でございました。弥縫にもならぬと思いますが、少し補わせていただけたらと冀うしだいです。

高校時代に國弘正雄先生の『英語の話し方』(サイマル出版)や『国際英語のすすめ』(実業の日本社)を通して東洋思想を達意の英語で語る鈴木大拙の事を知りました。

私はいま瘦躯鶴のごとき大拙老が、ロシア大学の満場の学生や教授連を前に、原稿らしいものを持たずに、若干古めかしい、しかし格調の高い英語で、東洋人の心を説いておられた姿を思いだしている。どこをどう押せばアメリカ人が click するかを熟知しておられたのであろう。

冗談や軽口も適宜まじえながら、満座をわかせることもしばしばであった。104頁ほぼ同じころ中央公論の「日本の名著」シリーズの中の橋本峰雄責任編集『清沢満之 鈴木大拙』を手にし、大拙の「日本的靈性」を読みました。いつしか大拙の文章に魅かれるようになりました。その後、大拙の文章を折に触れ読むようになり、気がついたら全集は新旧の二つを持っておりました。

今にして気づかされることは、大拙は東洋思想のみならず、西洋の思想、例えばドイツ神秘思想の著作、英文学の作品、英訳聖書なども相当読み込んでいるということです。であればこそ、米国人の琴線に触れる英語の講義が出来たのではないのでしょうか。

また高校時代は大学では梵語を勉強して仏典を原語で読んでみたいと思っておりました。今は梵語の文法書と辞典はありますが、文法などは初歩以前のままです。

二十年ほど前に新潮カセットライブラリーの中の「最も東洋的なもの」と題した大拙の講演のテープを聞きました。そこで「自由」という語が取り上げられ、はっとした思いになりました。読書中この語に当たると気になるようになりました。そしてちょうど昨年の半ばごろ、これまでの散漫な読書の果てに自分の中にあつた「自由」の語の疑問が解けたような思いになったのです。拙文はいわば個人的な読書ノートを臆面もなく白日の下に曝したものであるというわけです。

それではまず語の成り立ち～化学の構造式のようなもの～を見てみたいと思います。

「自由」＝「自」(人称代名詞)＋由(前置詞)

代名詞でなければ、「由」の目的語は後ろに来ます。

その次に語の原義～動詞の原型不定詞のようなもの～を見てみたいと思います。「由」という語はこの場合、実質的に主語を指し示すものだと思いますので、「自由」という語は自分が主体になることが原義になるのではないかと思います。

この「自由」という語は原義に基づいて様々なところで用いられます。その結果、様々な用例が登場します。

それを個人レベルで考えてみたいと思います。煩惱に塗れた俗人について用いられると、そのような欲望多き者が主体になるのですから、「自分勝手な」という意味の用例が生まれます。しかし修業を積んだ禅僧について用いられると、「随処に主となる」(随処作主) — 『臨濟録』の中の言葉(筑摩書房『臨濟録』、56、74頁) — というような意味の用例が出て来るのではないのでしょうか。

ところでヨーロッパの言葉の訳語としての「自由」という語が用いられたのはキリシタンの時代であるようです。前掲升田論文には興味深い記述があります。

・・・キリシタン時代初期にはキリスト教概念を伝えるに際して、日本人に馴染みやすい仏教用語による教理説明がなされたから、まず「解脱」が用いられたものと思われる。ところが後期刊では、「解脱」はまったく姿を消してしまい、「自由」のみが用いられている。 19-20頁

いまわたしたちは「解脱」という語は仏教の言葉、「自由」は仏教の言葉ではないような気がします。どちらも仏教の中にある語ですが、キリシタン文献において「解脱」という語より「自由」という語が「キリスト教教義を託す言葉」(20頁)として多用されるようになったようです。

それだけでしょうか。「自由」と「解脱」の

音に着目してみたいのです。ジ+ユ+ウという音は口の開閉が狭+狭+狭というように狭い音が連続しています。他方、ゲ+ダ+ツは狭+広+狭というように真ん中は口の開きが広くなります。また舌もダとツは口蓋、歯茎、或いは歯に当てなければなりません。舌の動きがそれだけ複雑になります。多用される語については言い易いことも重要です。「自由」のほうが発音しやすいのです。

また同論文には次のような記述もあります。

・・・キリシタン版に見られる「自由」と、禅宗でいう「自由」との親近性は新村出を初めとして多くの研究者が指摘するところである。 13頁

* 同論文(25頁)に挙げられた津田左右吉の「自由といふ語の用例」という文章(岩波書店『津田左右吉全集』第20巻、75頁)には「他から制約や拘束をうけないこと」の意味で用いられている東晋の『修行道地経』(春秋社『仏典解題事典』、75-76頁)の例が紹介されています。

また前稿でキリシタン文献の翻訳にあたり禅宗からカトリックに入った人がいるのではないかと書かせていただいたことが、誤りではないことを知り、胸を撫で下ろす思いです。津田左右吉の「自由といふ語の用例」という文章を読んでもその感を深くしました(80頁)。臨濟宗の僧侶であったハビアンがその代表的人物ではないかと思われます(井手勝美「ハビアン」教文館『日本キリスト教歴史大事典』、1127-1128頁)

ここでもう一度自分なりに確認させていただきます。

鈴木大拙の主張に従えば、「自由」という語は積極的、肯定的な物言いであり、'freedom'や'liberty'という語は消極的、否定的な物言いとなるでしょう。「解脱」という語もまた消極的、否定的な物言いです。「自由」と'freedom'や'liberty'では言葉の位相が逆さまの関係に

あります。そうであれば、どのような訳語を持って来ようともこの両者の間には埋めがたい隙間が生じます。その意味で 'freedom' や 'liberty' の訳語としては「解脱」のほうが相応しかったのかも知れません。

ところで「解脱」という語には暗に束縛するもの～例えば、煩惱～が前提されています。'freedom' や 'liberty' という語にも暗に束縛するもの、例えば、罪 sin～が前提されています。つまり「解脱」や 'freedom' や 'liberty' という語を用いるとき、話者は束縛するものを言葉に出さないとしても心の中に思い浮かべています。

しかし「自由」という語は自分が主体になるという意味ですから、そのような束縛するものを前提とするものではありません。大まかに言えば、自己のことが念頭にあるだけで、他者のことが考慮されていないように感じます。

丸山眞男「超国家主義の論理と心理」の中に、「現在なお国民はその呪縛から完全に解き放たれてはいないのである。」（下線、筆者注。以下同じ）（未来社『増補版 現代政治の思想と行動』12頁 — この文は『国際英語のすすめ』の中に引用されていたもの（12頁）を通して知りました）という興味深い一文があります。それは次のように英語に訳されています。

and even today they have not really freed themselves from its hold.

(Ivan Morris edit., *Thought and behavior in modern Japanese politics*,

Oxford University Press, 1963, p.1)

わたしたちがこの英語を目にしたとき、どのように訳すでしょうか。別段深く考えることなく、「呪縛から自らを自由にしていない」と訳さないでしょうか。両者の日本語を比べると、どことなく前者のほうが表現としてより正確で自然なように覚えます。

最後に新約聖書ヨハネ8章32節「真理はあなたたちを自由にする。」（下線は筆者注。以下、

同じ）（新共同訳）の漢訳聖書の箇所を見てみたいと思います。

真理必釈爾。（代表訳。上海墨海書館、1858年～一橋大学図書館三浦文庫所蔵）

真理將使爾自主。（BC 訳。上海美華書局、1863年～「幕末邦訳聖書集成②⑥」ゆまに書房）

真理必叫你們得以自由（Union Version、1919年）

真理必会使你們獲得自由。（フランシスコ会〔思高聖經学会〕訳、1968年）

代表訳のみが「解放する」という意味に即して「釈」という語を用いています。

明治に聖書を和訳するに際し、漢訳聖書を参考にしたようです（川島第二郎、土岐健治「初期日本語訳聖書と中国語訳聖書」『聖書の世界』自由国民社、440—454頁）。新約聖書の委員会訳（元訳）は1880年〔明治13年〕、旧約聖書の委員会訳（元訳）は1888年〔明治21年〕～452頁）。文語訳（1917年〔大正6年〕～442頁）の文は、「真理は汝らに自由を得さすべし」となっています。或いは日本における「自由」という語もまた漢訳聖書の影響を受けた日本語聖書の訳語が関係しているのでしょうか。

'freedom' や 'liberty' という語は束縛のある状態から束縛のない状態への移行を示す、動的なベクトルを有することばです。消極的に見えてダイナミックです。他方、「自由」という語は束縛の有無を問いません。それは主語のみあって動詞のない未動の状態を表わすことばです。積極的に見えてスタティックです。

いずれにせよ、幕末明治以降に 'freedom' や 'liberty' の訳語として「自由」という語が採用され定着したことは、近代日本が思想形成の跳躍を試みた時、或いはアキレス腱として働いたのではないかと妄想し溜息が出て来るのを禁じ得ないのです。